

日本版 Learning Stories（保育者版・保護者版）の モデル開発とアクションリサーチ

小泉 裕子（児童学科・教授）・佐藤 康富（初等教育学科・教授）

大野 和男（児童学科・准教授）・原 孝成（初等教育学科・教授）

関川 満美（初等教育学科・講師）森本 壽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）

上田 陽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）塚田 菜絵（東戸塚保育園・保育士）

1. 研究の目的

本研究は、保育の場における三者（保育者・子ども・保護者）が分かち合う「子どもの学びと発達のアセスメントモデル」の開発とそれを現場に取り入れるためのアクションリサーチである。

わが国の保育者は、質の高い保育を目指し反省的実践者として工夫を重ねている。日々の実践課題の中、現在最も期待されているのが、子ども一人一人の学びの体験を適正に評価（assessment）する方法の確立である。伝統的な方法には、保育日記、個人記録があり、観察したことを記述したり、指導した結果を記録するのが一般的である。また子どもを客観的に評価する方法として、チェックリストを用いた行動評価法もある。これらは、保育者が記憶をたどって再生する方法であるため、保育者の一方的な自己評価に陥りやすいと指摘されることもある。また、近年我が国でもエピソード記録のように、子どもの発達をナラティブな方法で記録する技法も用いられるようになってきたが、記録の生かし方や管理の方法が煩雑になるという課題が指摘されている。

筆者らは、平成26年度より「幼児の学びにおける評価（assessment）システム」構築のために、基礎的研究を行ってきた（佐藤・小泉他）。日本の保育者が待ち望んでいるアセスメントは、生活や遊びを通した子どもの学びや発達を可視化する方法であるとともに、日常の保育の改善に役立つ効果的な資料であり、煩雑になりすぎない習慣性の高い方法である。このような方法を実現するために、本研究をスタートさせた。

近年、子どもの学びを評価（assessment）する方法としてレジャージェンやスウェーデンの Documentation と共に注目されているのが、ニュージーランドの Margaret Carr 等の推進する Learning Stories（以下 NZLS）である。子どもの発達記録として、保育中のアクティブな写真を活用し、発達を assessment し整理していく方法である。このアセスメントの特徴は、「日々の実践の中で、保育者が子どもの学びを観察し、理解しようと努力し、理解できたことを保育に役立てるアセスメント法」であり、保育者間でしか公開し得ない閉じたアセスメントとは異なり、当該幼児が見て喜び、発達を実感させるための記録でもある。また当該幼児の保護者にとっても発達の喜びを分かち合う三者共有の情報公開型のアセスメントモデルといえる。この方法は、NZ の保育環境に適した優れた方法であり効果的な方法であるが、そのままわが国に導入できるものではない。わが国の保育文化を生かし、現場で汎用性の高い「日本版 Learning Stories（以下 JPLS）」モデルの開発に向けて、アクションリサーチを推進していく。

さらに JPLS モデルを、保護者の育児力向上にも応用し、子育て支援の場においても子

どもの学びと発達を支援する汎用的な評価（assessment）ツールとなることを目指し、アクションリサーチを展開しながらその効果を検証していく。

2. 研究の計画

（1）平成28年度計画

① NZLS 理論の研究- Wendy Lee 教授招聘講演と日本の保育者の意識調査

ニュージーランドの幼保一元化（1986）後、ナショナルカリキュラムであるテファリキが制定（1996）され、対応するアセスメントを作り出す取り組みの中で生み出されたのが、ワイカト大学の Margaret Carr 教授を中心とした研究チームが提案する「子どもの学びの物語（Learning Stories）」である。

Carr はこのアセスメント法を NZ 国内に普及させるため、同大学の Wendy Lee 教授らとともに保育現場でアセスメントプロジェクトをスタートさせた。旧来のアセスメントモデルでは、「子どもの学びはスキルの段階的蓄積による進歩」として説明し、幼児教育の役割は特定のスキルを順序よく確実に教えることだと考えられてきた。それに対して Carr の Learning Stories は、多くの保育者が望んでいた「日々の実践の中で、保育者が子どもの学びを観察し、理解しようと努力し、理解できたことを保育に役立てるアセスメント法」であると言われる。さらに、このアセスメントは保育の場における三者（保育者・子ども・保護者）が同じ情報を見て「子どもの学びと発達」について分かち合うことを可能にしたアセスメントモデルである。NZ 教育省によるとこのプロジェクトは保育現場に急速に普及していると評価している（2007）。

そこで我々は、Learning Stories の提案者であり保育現場で絶大なる支持を受けている Margaret Carr、及び Wendy Lee の理論研究を深めるため、二人の研究者から直接理論を学ぶ機会を設け、レクチャー及びインタビューを実施した。（2014,2015）

本研究では、Margaret Carr 及び Wendy Lee の LS 理論が、我が国の保育者に与える影響について調査するため、Wendy Lee 教授を招聘し、日本の保育者向け講演を計画する。Wendy Lee 教授、及び受講した保育者には、本研究の目的を説明し同意を得た上、講演終了後に受講した保育者に対し無記名式質問紙調査を実施し、結果を分析する。この結果は、日本版LSを作成する上の基礎的資料となるものである。

（2）平成29年度、30年度計画

① JPLS 開発のための協力園（幼稚園・保育所）及び保育者等へのアクションリサーチ

わが国の保育文化を生かし、現場で汎用性の高い「日本版 Learning Stories（以下 JPLS）」モデルの開発に向けて、アクションリサーチを推進していく。その際遵守する手続きは以下の通りである。

調査協力園及び保育者等は、保育の質を高めるための子どもの学び・発達のアセスメントモデルに関心がある園で、私たちとともにアクションリサーチを行うことに同意が得られた園、同意が得られた保育者を対象に行っていく。また、アクションリサーチ期間は、当該園の保護者の同意を得て、通常の保育活動に支障を来さないようにリサーチを行うこととする。リサーチで知り得た子どもの assessment に関する情報は守秘義務を徹底し、教育的効果を阻害することがないように配慮する。

一人一人の JPLS は、担当保育者・当該乳幼児・当該保護者の三者が共有する閉じた情

報であるため、それ以外の者に情報を公開する際（学会発表等）は、同意を得てから行うものとする。（当該乳幼児の同意は、当該保護者の同意を得る。）

リサーチ期間終了時には、協力した保育者に対し半構造化面接調査を実施し、統計的に処理を行うとともに、**JPLS**を活用した文脈的な効果を検証する。質問内容は「**JPLS**の実施で変化したこと（保育方法・子どもの発達の新たな気づき・保護者への対応・同僚との関係、保育職への興味＝専門的アイデンティティの変化）、**JPLS**の長所、問題点」の7項目である。

② **JPLS** 開発のための協力保護者（支援員・保護者）等のアクションリサーチ

わが国の子どもを持つ保護者等の子育て不安の現象は、1990年代より注目され、政府を中心とした子育て支援施策が20年以上にわたり展開されているところである。しかし、当初の母親らの子育て不安の意識と現在の母親の子育て意識を比較すると、社会環境の変化や施策の進捗状況により、様々な観点で子育て不安の様子は変化していると予想される。

現代の母親に共通する傾向として、インターネット等による育児情報過多の時代にあり、働きながら子育てを行う多忙な環境等が挙げられる。子どもの日々の発達に過剰に反応したり、あるいは全く無関心であることも散見される。目の前の一人ひとりの子どもを適正に理解することは、時間的かつ心情的に困難な状況がうかがえる。

現在わが国では、保育所や幼稚園、子育て支援施設での保護者支援の実施はすでに一般化しているが、「園と保護者の連携・協働」を重んじながらもその実態は園からの一方通行の情報提供といわざるを得ない。本研究では子育て支援の一環として「保護者版 **Learning Stories**」を提案しながら、保護者の子育て意識を直接的に変化・育てることを目標としたアクションリサーチを行うこととする。

「保護者版 **Learning Stories**」を書く事を通して、子どもの発達の視点を保育者と共有することに寄与し、保育者と保護者の子育ての連携を現実的なものになるか検証を重ねて行くこととする。

3. 本年度成果報告

（1）Wendy Lee 招聘講演報告

本研究チームは、過去2年間ニュージーランドの保育改革と成果（子どもの学びの記録“**Learning Stories**”）に注目し実地調査を重ねてきた。平成26年9月には、テファリキ作成に携わり **Learning Stories** を考案した Margaret Carr 先生から直接講義を受けることができた。また、翌年9月には **Learning Stories** 推進で NZ の保育者から絶大な支持を得ている Wendy Lee 先生と直接お会いし講話を受ける中で、日本の保育現場への示唆を多数得ることができた。

そこで私たちは NZ での成果を、日本の保育現場にも広く紹介したいと考え、わが国における **Learning Stories** 活用の可能性等について、現場の保育者らと学び合うと共に、日々の保育の質的向上のための具体的な取り組みの一助になるべく研修の機会となるよう

Wendy Lee 招聘プロジェクトを計画、実現する運びとなった。

※招聘プロジェクトメンバー（運営主催：Wendy Lee 招聘講演実行委員会）

実行委員長：佐藤康富（鎌倉女子大学短期大学部教授）

事務局長：小泉裕子（鎌倉女子大学教授）

実行委員：

近喰晴子（秋草学園短期大学学長）若月芳浩（玉川大学教授）

原孝成（鎌倉女子大学短期大学部教授）大野和男（鎌倉女子大学准教授）

森本壽子（鎌倉女子大学幼稚部部長）岸井慶子（青山学院短期大学部教授）

守巧（東京家政大学講師）関章信（福島めばえ幼稚園理事長）

岩本勉（相模大野幼稚園園長）佐伯妙有（伊勢原ひかり幼稚園園長）

永保貴章（田名幼稚園副園長）仁藤一成（川崎こまどり幼稚園理事長）

志村富子（川崎サクラノ幼稚園園長）山崎和子（鶴見大学附属三松幼稚園園長）

江津秀子（八幡橋幼稚園園長）坂本 光祥（株）ゴーフォーイト代表取締役

応援スピーチ：NZ 大使館エデュケーション・ニュージーランド（教育担当官）

講演日：2016年7月16日（土）14:00～16:00 会場：鎌倉女子大学教室棟 大講義室

演題： The POWER and the PASSION of the TEACHER

TEACHING WITH PASSION AND POWER TO STRENGTHEN
LEARNER IDENTITY THROUGH LEARNING STORIES

参加者：神奈川県私立幼稚園協会連合会所属幼稚園教諭・公立幼稚園教諭 182名、
鎌倉女子大学生103名、大学関係者11名の合計296名の参加。

★講演会の様子：★講演概要は別刷にて報告する。



（２）日本の保育者等の事後アンケート結果と考察

Wendy Lee 氏の講演後、参加した保育者に対し事後アンケートを実施した。

参加者のうち有効回答が得られたのは、保育者で74.18%（135/182）、そのうちの70.5%が私立幼稚園教諭であった。また大学生からの有効回答は74.76%（77/103）であった。

参加者の中ではNZの“Learning Stories”について、以前から「ほとんど知らなかった」と解答しているのは64.2%であったが、全体の95.3%が講演を聴いて「関心が持てた」としている。また、“Learning Stories”は「優れた方法」（93.8%）であると感じている人が殆どであったことは大変興味深い結果である。Wendy Lee 氏講演後に“Learning Stories”を「書いてみたい」（78.1%）、「日本でも応用できる」（88%）と回答しており、Wendy Lee 氏の講演によって、“Learning Stories”が我が国の保育現場にも応用できる可能性が強く示唆されたといえよう。次年度の研究では、保育現場及び子育て支援施設での“Learning Stories”導入に関するアクションリサーチの結果を報告していく。

